

札幌聖心女子学院

初めてのタイ体験学習

50ページほどの小冊子がある。生徒が描いたのか可愛らしいイラストの表紙に“Study tour 1999, Thailand”と読める。どのページも、「笑顔で挨拶を返してくれるタイの人たち」「タイ大好き」「アジアを知りたい」といった喜びと感動の声でいっぱいである。これは、昨年初めて実施された札幌聖心女子学院（札幌市中央区宮の森2条16丁目 宇野三恵子校長）のタイ体験学習に参加した1年生から3年生までの高校生20名の文集である。

札幌聖心女子学院は、今年創立200年を迎えた「カトリック女子修道会聖心会」を設立母体とする学校でキリスト教の精神に基づいた教育を行っている。中学から高校までそれぞれ2クラス、生徒数435名の小規模な学校であるが、各国の教会関係者の来訪など日常的に海外との交流があることから、早くから国際理解教育を進め、英語教育にも力を入れてきた。毎年、アメリカでのホームステイ研修も行っている。

昨年、タイに生徒を引率した宇野校長は、「この4年間、自ら学び、自ら考える力を生徒たちの内に育てたいと願って放課後を利用した課題研究グループの活動を続けてきました。タイ体験学習はその積み重ねがあって実現しました」という。自主参加の課題研究グループの一つで国際文化をテーマにする「国際文化ミーティング」では学外の専門家を招いての勉強会や発表を行うほか、今までも国内の他の聖心の学校が行う韓国やフィリピンへの研修にも参加してきた。その延長線上で実現したのがタイ訪問、タイ体験学習であった。

社会福祉学習や「梅干し弁当」の日

同学院では、昭和57年（1982年）に必修で週1時間の「体験学習」をカリキュラムに取り入れた。これを平成3年（1991年）度には「社会福祉学習」と改称して、「他者の置かれている状況を理解し、共感する心と、その必要に応える実践力を培う」ことなどを目的とした授業を進めてきた。具体的には、中学校では、編み物や縫い物をは

じめ、お菓子作り、工作、目が不自由な人のための拡大筆写、グローバルシミュレーションなどを行う。グローバルシミュレーションでは、配られた大豆の数の違いから先進国と発展途上国に住む人々の思いの違いを感じ、考えたり、発想の転換をしなければ解決できないような課題を提示するなど、「気づきの体験」を生み出すためのシミュレーションが行われる。高校では、点字、拡大筆写、手話、音訳の習得や手芸などの活動、また、盲・聾学校との交流や病院リハビリテーションセンターなどでの介護実習等も体験する。

また、学校全体で「梅干し弁当」の日を設けて、その日の昼食代を国内外の時々災害地などに寄付するなど他者を思いやる気持ちを育むことを目指した行事も行っている。

「難しい事ではなく、 分かち合うことです」

冒頭の文集には、訪問した学校で伝統の踊りや音楽を披露するタイの生徒たちの姿に感嘆したり、行く先々で古い歴史の遺産を見て感動したという報告がたくさん載っている。「この訪問はボランティア活動を行うことなどを目的にしたのではなく、アジアの他の国々の歴史と文化の豊かさを体験すると共に、様々な問題に、社会で、広い視野を持ち積極的に行動できる人になれるようにと願って企画しました」という宇野校長の言葉には、今、国際協力という、とかく、“困っている国を助ける”といった考えに傾きがちなのは異なり、「共に生きる」という同学院の建学の精神のひとつに根ざした姿勢が感じられる。

ひとりひとりの生徒が「気づき、知った」ことを「振り返り、他の人たちと分かち合う」ことが大切だということで、タイ体験学習を通じて課題を持ち帰った生徒も多いようである。訪問先のプラティープ財団（貧民救済を行っている）への道すがらスラム街を通った時の気持ちを、「大型観光バスから人々を見下ろさなければならぬ。この目線の高さの違いは、罪悪感を引き起こす。彼らのために何ができるだろうか」、あるいは「ピカピカ照らされた日本企業の看板。その下で屋根を連ねて暮らしている人々の姿に大きな衝撃を受け、現実を知ることができた。これからの自分の生き方を考えたい」と書き記した高校3年の2名の生徒。

高校1年のある生徒は、「誰にでも挨拶ができるようになって少し自分に自信がもてるようになりました。タイで経験したことを忘れずに世界に視野を広げていきたいと思います。好きです。タイ」とレポートを結んでいる。「日本について知らないことが多い。相手に説明

できない自分を見つけた」という感想もあった。彼女たちが体験したことは、その後、同級生や他の学年の生徒たち、家族、友人たちに伝えられ、その感動が分かち合われたにちがいない。

立命館慶祥中学校・高等学校

世界に開かれた教育を

夏休みも終わろうという8月下旬、札幌で「立命館国際フォーラム」という行事があった。立命館大学創始130年、学園創立100周年などを記念して立命館慶祥中学校・高等学校（江別市西野幌640-1、高杉巴彦校長）が主催し、同校生徒や先生たち、家族、一般市民が参加した。

同校は、近代日本を代表する政治家で自由主義、国際主義を主唱した西園寺公望を学祖として開学した立命館学園の付属中学校・高等学校で、同学園の建学の精神「自由と清新」のもと、「平和と民主主義」の理念を掲げた教育を行っている。建学当初から世界の中の一員として世界と協調することの重要性を認め、真の国際化の実現を担う人材の育成を図ろうと国際理解教育や外国語教育に力を入れている。

魅力的な国際交流プログラム

海外研修旅行、語学研修と第二外国語の履修（選択）、カナダやアメリカとの交換留学や相互交換交流など「21世紀の国際社会での活躍をめざした、国際教育と海外研修」を行う学校ということで「将来は国際公務員に」とか、“国際人になろう”と決意して入学してくる生徒も多いという。

海外研修旅行は毎年9月に高校2年生が全員参加する。今年はリトアニア（現地の提携校2校）、ベトナム（提携校1校）、マレーシア、ドイツ、モルディブ、中国・内モンゴルを訪れた。単なる海外旅行ではなく、それぞれのコースに学校交流・歴史・ボランティア・環境問題等のテーマが設定されており、希望するコースを決めた後、各テーマについての事前学習を十分に行った上で実施している。訪問先ではテーマを決めて同年代の生徒同士で討論を行うこともある。同校国際交流委員会の水越教諭は「単に物珍しいというだけの関係ではなく、考え方の違いに気づいたりするきっかけになります。定期的に交流することは意義があると思います」と語る。

生徒にとって日本人の枠を越えた考え方を身につける良い機会になっているのが、アメリカの提携校との短期相互交換留学とカナダの提携校（1年間）との交換留学で、毎年、それぞれ1、2名が留学を果たしている。海外提携校からの交換訪問もあり、生徒の家にホームステイし、滞在中は一緒に



放課後の国際文化ミーティング
（札幌聖心女子学院）